

ガラスたちの永遠

淡波亮作

序

どれほどの数の魂の欠片が
今までに

どれほど広汎に
散らばっていったのだろう

私自身には見えない
その透明な魂は

いつかもしどこかで出逢つたら
互いを認識することが
できるだろうか

そして呼び合い
融合することが
できるだろうか

「主に変態だよ、私のテリトリーは」

「ヤダ、変態？ 痴漢とかロリコン？」

えいみ

永美は我が耳を疑い、苦笑いを浮かべながら市田教授の知的な瞳を窺った。市田教授はそれに応えるように、同種の苦笑いを浮かべその瞳を閉じた。

「その『変態』じゃない、メタモルフオーゼだよ、生物学でいうところの変態」

「メタモルフオーゼ？ ケプラーズとかの？」

「なんだいそれ？」

「あ、知らないんだ？ SFで、あるの、人類が地球を滅ぼしちやつて、ケプラーなんとかつて星に移住して。で、いろいろあるんですけど、最後は星の環境に適合するためとかつて、そのメタモルフオーゼでお猿になっちゃう。先生の言う変態つて、そういうやつでしょ」

「猿に？」

「うん、地球の猿じゃないんだけど、猿みたいな現住生物つていうのに」

「ふーん……」市田教授は窓の外に目をやる。「アレだな、ケプラーつていう有名な天体望遠鏡があつ

たね。確か、その望遠鏡で発見された惑星はケプラーの何番って命名されるんだったかな」

「へえ、本当にあるんだ。さすが、お堅いことには詳しいんだね」

「お堅い、ね。で、そのケプラーズってのは面白いのかい」

「うん、すごい面白い。でもその最後のメタモルフォーゼがナゾなのよね、賛否両論ってヤツで」

「どうしてそんなものを読んだの？」

「ううん、本は苦手。映画で観たの、低予算のB級映画。でも界限じゃ、それなりに評価されたんだってシンジが……あ、ごめんなさい、昔の、彼——」

そう小さく言い添えると、永美は小さく舌を出した。市田教授は研究室の窓を開け放ち、大きく深呼吸した。

「気にしてないよ。昔のことは昔のこと。今の永美にしか、いや、今と将来の永美にしか興味ないから」

「先生——」

永美は市田教授の白衣の袖をそっと摘み、肩口に頬を当てた。

永美は思い出していた。この人と恋に落ちたのは、やっぱりきつと、運命なのだ。そうでなければ

こんなこと、あり得ないではないか、と。

——もちろんそれは、永美の都合の良い思い込みだ。

永美は社会人入試で、三十歳になる直前にS大学に入学した。高校を卒業して以来ずっと、勉強をせずに大人になったことを後悔していた。もう遅い、と何度思いとどまったことだろう。だが、三十歳という一区切りの迫っていることが、永美の背を押した。このまま、無知なおばちゃんとして老けてゆくだけは避けたかった。元々、何かを学ぶことは嫌いではなかった。やり残したこともあった。だが、高校生の頃は青春を謳歌するのに夢中で、学業の大切さなど、思い至ることなどなかった。

市田教授は若くしてS大学の教授職にまで上り詰めたエリートだ。いや、エリートというのは語弊があるかもしれない。彼の研究はこの上なくニッチで、ライバルなどいなかった。しかも、学長がたまたま昆虫オタクだったから、彼の業績を実際以上に評価したのであろう。学長にも打算はあった。もし本当に市田の研究が日の目を見たとしたなら、人間の暮らしを根底から変革させるに足るものであったのだ。どう考えても夢物語にしか過ぎないものでは

あつたが。

——あの時までには。

市田教授は、そつと永美の肩を掴んで距離を開け、語り始めた。

「これはね、世界を変革させる、素晴らしい研究なんだ。いや、人間の生き方を根本から変えてしまう可能性を秘めた、恐ろしい研究と言えるかもしれない。君のさつきの話、ケプラーのメタモルフオーゼは作り話だけど、こつちのメタモルフオーゼは現実なんだ」

「人間が、メタモルフオーゼする？」 永美が小首を傾げた。

「そうだ」

市田は永美の肩から手を離し、再び窓の外を見つめた。林には春の匂いが充満していることだろう。視線を林の木々から青々と密生する草に移すと、市田はそのまま続けた。

「青虫が、どうやって蝶になるか知ってるかい？」

「サナギになつて……」

「そうだ」

市田は微笑んだ。この微笑みがあれば、私はそれだけで満足なのだ、と、永美はいつも思う。その微笑

みは、何もかもを包み込み、『いいよ』と言つてくれるような優しさに溢れていた。市田は続けた。

「サナギの中で、青虫がどうやって蝶になるかは？」

「知ってるよ。気持ち悪いんだよね、なんか、いったんドロドロの液体になっちゃうんでしょ？」

「そう、それがメタモルフォーゼの神髄なんだ！」

市田は破顔し、なぜか永美の両脇を抱えて身体を高く掲げた。

「うわ、先生、なにに!？」

市田は何も答えず、ただ、嬉しそうに笑い続けた。

二

どんなに重い病に侵されていようと、事故や病気で肉体の機能をほとんど失つていようと、遺伝子が無事でさえあれば全てを再構築することが可能なのだ。青虫が蛹の中でいったんドロドロの液体となつて変態を遂げるように、人体を電子レベルで分解し、遺伝子情報のみによつてゼロから体構造を組み替えるのだ――。

市田は書きかけた文章から目を上げ、乾いた眼を

閉じて目頭を押さえた。永美の笑顔が、浮かんでいた。

——2年前、春。

「さあ、今日は君たちにとって、大学で初めての授業だよ、僕はこのコマを受け持てたことを幸せに思う。この場所に今、何人くらいがいるか分かるかい？」

市田教授は子供のような笑みを浮かべ、だだっ広い大講義室を見回した。

村蘭永美は窓際の席に陣取り、まさか誰かを指すようなことはないだろうと思いつきながらも少しだけ緊張していた。教授の視線は永美には留まらず、通り過ぎたようだ。

「千人以上……？」

永美はそれでも、もし指されたときのために、小さな声で呟いていた。

「千人くらいって思った人、まずまずかな。登録者の人数からいくと、千三百六十七名だ。その中でいきなり初日からサボれる強心臓が何人いるか分からないけど、千三百名は下らない。で、どうしてこんなことを喋ってると思う？」

今度は講堂内をぐるりと見回すこともなく、市田

は続けた。

「千三百割る三百六十五は三・五だ。ということは

——」
「去年と同じネタだよー」

どこからかそんな声が聞こえた。市田は聞こえぬふりをして続けた。

「つまり、この講堂の中には、同じ誕生日の人が三人以上いるって計算になる。僕と同じ誕生日の人がね！」市田は、『僕と同じ』という部分にことさらに力を込めた。「さ、エイプリル・フールが誕生日の人は立って！」

ダン！

気がつくとも、無意識に永美は席を立っていた。待ちに待った大学の授業初日という緊張感、そこに、先ほどのちよつとした緊張がプラスされて、永美は市田の術中にまんまとはまったのだった。周囲から失笑が漏れていた。

「あ——、」

我に返った時にはもう遅く、永美は大講堂を埋める全学生の注目を浴びることになったのだった。

「一九八五年、四月一日生まれ、三十歳。市田瞬です。どうぞよろしく。きみは？」

「え、あたし——？」

永美は赤面し、周囲を見渡した。

「座ればあー」

去年と同じネタだよーと言ったのと同じ声が、どんよりと響いた。永美はいたたまれず座り込み、目をギュツと閉じていた。なんていうことだろう、これが憧れの大学生活の初日だなんて！

せつかくの初授業内容は、結局何も頭には入らず終いになってしまった。

あろうことか、二度目の邂逅はその日のうちにやってきた。初体験の学食は、思いのほかいなものだった。勤めていた会社には社員食堂はなかったし、給食とは全然違う、強いて言えば、オシヤレとダサいの間くらいのレストランにある食堂に近い感じかな、と食べ終わった食器をぼんやりと見つめながら考えていた。午後一番には授業がなかったから、図書館にでも行ってみようと席を引いた永美の目の前に、あの、笑顔があった。

「あ、食べ終わっちゃったところか。せつかく愛の告白をしようかと思っただのに！」

市田瞬だった。目をまん丸く見開いた真顔の永美に、市田は舌を出した。

「エイプリル fool！」

ガタン。

永美はムツとして席を立っていた。

「ごめん！ 同じ誕生日のよしみで許してくれないかな。ね、そうだったよね、きみ」

呆れて首を左右に振り、永美は席に座った。市田は嬉しそうに、カレーライスの皿をトンと置いた。

「僕は市田瞬。お名前は？」

「村菌です。村菌永美」

「きみもカレーライスだったね。勘がいいな、一番美味しいんだよ、こっちの学食ではさ」

永美の口角が少しだけ上がったのを確認してから、市田はパクリとひと口目を頬張る。

「同じ、誕生日なんです」別に喋るつもりはなかったが、なぜだか声が出ていた。

「ん？ 『なんです』、なんて言わなくてももちろん知ってるよ」

市田が不思議そうに言った。

「えつと……そうじゃなくって、同じ学年でゆうか……」

「わつ、一九八五年、四月一日生まれ、三十歳！ そういうこと!?!」

「大きい声で言わないでください！ 周りは若い人ばかりなのに、おばさんだつてばれちゃう！」

市田は無言でスプーンを左右に振ると、視力検査でもするように片目を塞いだ。

「うん、よく見える。僕にはきみの精神の若さが、

あ、それから、素直さがよく見えるな」

永美が一瞬返答にあぐねていると、市田はまたカレーライスに集中し始めた。子供ののように夢中で、きつとこれまでに何百杯となく食べたカレーを、愛おしそうに食べている。そうやって口いっぱいにかレーライスを頬張る市田を見ていた永美は、ふいに、負けたと思った。

負けた。

恋に、落ちてしまったのだ。まだ何も喋っていないに等しいのに、私なんか若い学生たちの中に入ったらひときわ老けているのに、という思いが、逆にその気持ちを後押ししてしまっていた。だがもちろん、この気持ちは胸に秘めておくべきだろうと、永美は心に決めたのだった。少なくとも、市田がこのカレーライスを食べ終わるまでは。

「前言撤回するよ」

最後のひと口を飲み込むと、ガラスのコップからグイッと冷たい水を飲み干して、市田が言った。ツートット、コップの側面に残った水滴が、少し黄ばんだテーブルに落ちていった。永美はどきどきしていた。水滴を見つめていた。市田がこのあとで何を言うのか、分かっていた。いや、夢見ていた。

「エイプリル Fool だけど、嘘は言わないことにし

た」

永美は無言で頷いていた。

「理由は分からない。うん、理由はない。でも……」

「でも……?」

「きみを好きになった」

頬が緩んでいた。驚くよりも、それを受け入れることがなぜだか自然なことに思えた。

「私も」

何かを判断する前に、勝手に声が出ていた。

「誤解しないで欲しい」

「誤解しないでください」

二人が同時に言っていた。聞いていた。

〈続きは電子書籍版にてお楽しみください〉